

未来を創造する合意形成のあり方

—子供の思考を深める指導の工夫—

The way of consensus building to create the future

—Teaching ideas to deepen children thinking—

藤 本 仁

(Hitoshi, FUJIMOTO)

1. 社会の動向と子供たちの教育環境を取り巻く状況等（背景）

（1）社会の動向

① 少子高齢化、グローバル化等の進行

2030年には、65歳以上の割合は、総人口の1/3に達し、生産年齢人口は総人口の約58%にまで減少すると予測されている。また、一説には、今ある職業の数十%の職業がAIやロボットに変わられる。（昔、電車に乗るには、切符を購入し、改札ではさみ〈人〉を入れる。現在、改札は、ICカードで、無人）また、自動車の無人運転が実用化されれば、運転手が要らなくなる。

グローバル化や情報化が進展する社会の中、一つの出来事が広範囲かつ複雑に伝播し、先を見通すことが一層困難になっている。出来事が直ぐに拡散〈SNS等で〉多様情報、真実は明確ではないが、各自の判断任せの状態である。

② 地域社会の教育力の低下

都市化、過疎化の進行、家族形成の変容、価値観、ライフスタイルの多様化等、地域社会等のつながりや支え合いの希薄化となっている。

地域を巡る状況は、個人生活の充実など個人の利益を大切にする傾向にあり、互助・共助の意識も希薄なことから、貴重な学びの場や成長の機会・場が失われ、地域社会の停滞の傾向が見られる。また、これまでの社会教育団体も活動への参加者が十分集まらず、役割が果たせないケースが生まれている。

③ 地域コミュニティを創出する動きの広がり

保護者や地域住民の側に、自ら子供たちに積極的にかかわり支援することによって、自分たちの手で学校をより良くし、子供たちを育てていこうとする意識や志が生まれつつある。

学校を核に地域全体を「学びの場」と捉え、町全体の元気を取り戻しつつある。

④ 家庭教育が困難な現状等

核家族、ひとり親家庭、共働き世帯、大人の引き籠りの増加など、家族形成の変容やつながりの希薄化等、生活保護世帯の増加に見られる貧困問題の深刻化、子育て不安や問題を抱えて孤立

する保護者の増加、児童虐待相談対応数の増加など、家庭教育が困難な現状が指摘されている。
(親の経済格差が、子供の教育格差につながる)

子供が被害者、加害者となる様々な事件が発生しており、地域で家庭や子供を見守り支えることの必要性も指摘されている。

(2) 子供たちの教育環境を取り巻く状況

① 児童生徒数の減少等の状況

児童生徒数の減少や社会状況の変化等を背景に、小・中学校の統廃合、高等学校の再編・統合が進んでいる。今後、学校の小規模化や学校がなくなることによる地域コミュニティの衰退が懸念されている。

② 子供たちの規範意識等に関する課題

多様な価値観をもった人々との交流や体験の減少などを背景に、子供たちの規範意識や社会性、自尊意識等に対する課題、生活習慣の乱れによる学習意欲や体力・気力の低下の課題等が指摘されている。一方、社会貢献への高い意欲、柔軟で豊かな感性と国際性を備えている面も見受けられ、未来を創り出す主体性とともにもその可能性を最大限に引き出し開花させることが求められている。

③ 子供たちの生活環境

保護者等大人の生活体験や価値観の多様化から、子供の生活体験、価値観も多様化している。このことが、以前の子供たちの生活体験との違い(情報や環境の拡大から、習い事、塾、運動の多様化、野球、サッカー、スケボー、ダンス等多様)、遊びも同じ場所にいるが遊びを共有しない、人と関わらないで機器を媒介として遊ぶ。個々の遊び、電子ゲーム、スマホ等の使用の低年齢化、開発の進歩、情報収集の方法も多様化(新聞、スマホ(SNS)、グーグル、ヤフー等のサイト、テレビ、新聞離れ)している。

昭和50～60年代から、平成10年くらいまでの子供たちの生活環境は、高度成長経済からバブルの崩壊の中、集団で遊び、ゲームも数人で共に行う卓上物、習い事は、そろばん、習字、ピアノ等で、運動も野球が主体、テレビ番組も同じものを視聴していた。このときには、考えに対してより多くの者が賛同することで(多数決)決める機会が多くあり、それに従うことで「よし」とされた。しかし、昭和60年のいじめ問題から子供たちの人間関係の育成等、各自の考え(少数意見)を大切にすることが広がり、多数決に変化はないが、少数意見を取り上げ、多数意見に取り込む(合体、付けたし等)ために少数意見者を説得、逆に、少数意見者にすれば『妥協』『従う』などするような傾向が見られたが、それでも『多数決』であった。

④ 学校が抱える課題の複雑化・困難化等の状況

いじめや暴力行為等の問題行動の発生、不登校児童生徒数、特別支援学級・特別支援学校に在籍する児童生徒数、日本語指導が必要な外国人児童生徒数等の増加等、その多様な対応が必要な

状況など環境が複雑化・困難化し、教員だけで対応することが質的・量的に難しくなっている。また、団塊の世代の大量退職による若手教員の増加、教育内容の変化（新たな教科：道徳科、英語等）による総授業時間数の増加から、特別活動（学級活動：話し合い活動〈学級会〉）の指導が充実されない現状もある。そして、子供自らが課題を発見し、解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習の充実など授業改善を図ることが求められている。

2. 教育課程における特別活動の役割

平成29年3月に告示された新学習指導要領の前文に「教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会が共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていく」という理念が示された。そして、育成を目指す資質・能力の三つの柱として「何を知っているか、何ができるか」（知識・技能）「知っていること・できることをどう使うか」（思考力・判断力・表現力等）「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」（学びに向かう力、人間性等）が示された。これを受けて、特別活動で育成を目指す視点として、自己と他者、集団・社会を考慮して「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3点が示された。

以上のことを踏まえて、特別活動の目標が次のように変更された。

特別活動の目標

第1 目標

集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的・実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

- （1）多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることを理解し、行動の仕方を身に付けるようにする（知識及び理解）
- （2）集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。（思考力、判断力、表現力等）
- （3）自主的・実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。（学びに向かう力、人間性等）

この目標に示された「集団や社会の形成者としての見方・考え方」とは、各教科等の特質に応じて育まれる見方・考え方を総合的に活用して、集団や社会の形成者という視点から課題を見だし、よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会への参画及び自己の実現の視点からその問題を解決するために考えること記されている。

すなわち、特別活動で身に付けた資質・能力は、社会に出て生活していく上で、重要な働きをす

ることを明確にしたものと受け止めることができる。

さらにこの点を重視し、特別活動をキャリア教育の要として位置付け、一つの集団活動を事前から事後までの一連活動として捉え、「振り返り」の必要性を明確にし、次の課題解決へつなげる役割として位置づけている。このことは、特別活動の授業改善の視点、活動の積み重ねの大切さとともに新たな活動内容として、学級活動（３）を新設し、学級活動の重要性を訴えたものと捉えている。

３．学級活動の活性化と「合意形成」（今なぜ、合意形成）

今次の学習指導要領では、児童の自発的・自治的な活動の中核的な活動である「学級活動」の目標が大きく変更した。以下のように、目標自体が学習・活動の過程を示したものとなっているからである。また、これまで、学級活動の話合い活動では、「集団決定」とされていた言葉が「合意形成」に置き換えられた。その「合意形成」という文言は、小学校では、特別活動の目標（２）などを含め「学級活動」などの中に計８箇所に見えて記されている。また、ここでは次のことも押さえておきたい。

「第３ 指導計画の作成と内容の取扱い」に新たに示された次の文言である。

「（１）特別活動の各活動及び学校行事を見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会への参画及び自己実現に資するよう、児童が集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組む中で、互いのよさや個性、多様な考えを認め合い、等しく合意形成に関わりを担うようにすることを重視すること。

このことについては、質の高い学びを実現する視点から特別活動における見方・考え方を働かせながら、「主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること」が明記されたものと捉えることができる。さらに、学級活動（１）に関する内容として、次のように記されている。

ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

学級や学校における生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図り、実践すること。

この内容は、特別活動における自発的、自治的な活動の中心となる内容である。特に、自分と異なる意見や少数の意見も尊重し、安易に多数決で決定することなく、折り合いを付けて集団としての意見をまとめることの大切さを理解したり、合意形成を図っていくための手順や方法を身に付けたりすることができるようになることを意味している。このことは、児童会活動やクラブ活動において自発的、自治的な活動を行っていく上での基盤になるものである。（参考：小学校・学習指導要領解説「特別活動編」P49）

なお、こうした学級活動（１）の学習活動の（例）として次のように示されている。

学級活動「（１）学級や学校における生活づくりへの参画」の学習過程（例）

ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

①問題の発見・確認→②解決方法等の話し合い→③解決方法の決定→④決めたことの実践→⑤振り返り→⑥次への課題解決

そして、③「解決方法の決定」には、「意見の違いや多様性を認め合い、折り合いを付けるなど集団としての考えをまとめたりして「合意形成」を図る」と示されている。

また、学級指導要領第6章の第2（学級活動）の3の（1）において、学級活動の学年段階の配慮事項に関して、以下のように示されている。

（1）指導に当たっては、各学年段階で特に次の事項に配慮すること。

（第1学年及び第2学年）

話し合いの進め方に沿って、自分の意見を発表したり、他者の意見をよく聞いたりして、合意形成して実践することのよさを理解すること。基本的な生活習慣や、約束やきまりを守ることの大切さを理解して行動し、生活をよりよくするための目標を実行すること。

（第3学年及び第4学年）

理由を明確にして考えを伝えたり、自分と異なる意見も受け入れたりしながら、集団としての目標や活動内容について合意形成を図り、実践すること。自分のよさや役割を自覚し、よく考えて行動するなど節度ある生活を送ること。

（5学年及び第6学年）

相手の思いを受け止めて聞いたり、相手の立場や考え方を理解したりして、多様な意見のよさを積極的に生かして合意形成を図り、実践すること。高い目標をもって粘り強く努力し、自他のよさを伸ばし合うようにすること。

解説書では、このことを受けて、次のように記されている。（学級活動（1）のみ抜粋）

低学年では、教師の助言を受けながら発表の仕方や意見の聞き方など基本的な話し合いの進め方を身に付けることができるように配慮する。特に入学当初の時期においては、教師が話し合いの司会の役割を受け持ち、記録についても担当するなどして、話し合いの進め方を実際に見て、理解できるようにすることが大切である。また、合意形成によって決めたことをみんなで実践することのよさを実感できるような活動となるよう配慮する必要がある。話し合いで決まったことをすぐに実践することによって、合意形成の意義を体感することができる。そのため、1単位時間の中で、前半の時間で話し合いを行い、後半の時間を使って決めたことを実践することも有効である。

中学年では、理由を明確にしたわかりやすい発言、自分と異なる意見の受容、公平な判断ができるように特に配慮する。また、学級会において提案理由を踏まえ、自分もよくみんなもよいものとなるよう合意形成を図り、決まったことをみんなで協力し実践できるように適切な指導をすることが大切である。なお、自分の考えと異なる意見に決まっても、気持ちよく協力することの大切さについて実践を通して理解できるよう指導する必要がある。集団の中の仲間としての結び付きが強く

なる反面、集団同士の対立も見られる時期であることから、話し合いや実践を積み重ね、協働して取り組む活動を充実させていく必要がある。

高学年では、一つ一つの出された意見を大切に受け止め、意見の背景にある相手の立場や考え方を理解できるように特に配慮する。また、出された意見を基にして、組み合わせたり、よいところを取り入れて新たな考えを生み出したりするなど、創意工夫を生かして合意形成を図ることができる活動となるよう配慮する。建設的な話し合いが求められる高学年においては、一連の活動を振り返り、次の活動に生かしていくことを意識した取組が大切になる。

この配慮事項を読み解くと、次のことを注視したい。

低学年では、自分の意見を発表（相手が聞く）、相手の意見をよく聞く（自分の考えと比べる）このことで「合意形成」してとある。意見の聞き合いで、どのように合意形成を図るのかについては、ここでは、担任教師が合意形成の意味を含め、合意形成とは、ということを理解していないと無理と考える。

中学年では、集団としての目標や活動内容とは、補足の説明から、公平な判断するその基準が「提案理由」と考えると、提案理由の重要性、その練り上げが必要となると捉える。また、相手の考えを受容することは、互いに WIN-WIN の関係の案にすることにつながる。このことは、新たな「発想」になる。

高学年では、相手の思いを受け止める、相手の立場を理解する、このことは、自己理解とともに他者理解が重要となることを示している。そして、組み合わせたり、よいところを取り入れたたりして、「新たな考え」と生み出すことを示している。このことは、中学年の段階から考えて、WIN-WIN の「新たな発想」と考える。

これらのいくつかの考えを基に、「合意形成」について考えてみた。

4. 集団による意思決定と「合意形成」

集団における意思決定は、その集団の特徴を表すものであり、大きくは次のような3つが考えられる。①リーダーが考え、決めてことを伝達するもの、②皆の考えを聞き、リーダーが決めるもの、③皆で考え、皆で決めるものである。児童の自発的、自治的な活動の中心である『学級活動』は、言うまでもなく、③「皆で考え、話し合い、合意形成を図るもの」であり、それには幾つかの方法がある。例えば「多数決」或は「調停」場合によっては「独断」というものもある。それでは改めて「合意形成」とは何であろうか。

合意形成（consensus building）とは、ステークホルダー（多様な利害関係者）の意見の一致を図ること。特に議論などを通じて、関係者の根底にある多様な価値を顕在化させ、意思決定において相互の意見の一致を図る過程のことをいう。

ここで大事なことは、『賛成・反対』という主張ではなく、その裏にある理由（利害や関心）を聴き、それらを満たす提案をし合うこと。合意形成を図る過程のことを合意形成過程と言う。（参考：フ

リー百科事典「ウィキペディア」)

- ① build a consensus about…～について合意（コンセンサス）を形成する
- ② build a consensus among…三者以上の間に合意（コンセンサス）を形成する、三者以上の間で意思統一を行う
- ③ build a consensus as to…～について合意する、～について（コンセンサス）を形成する

学級活動には「ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決」に「解決方法の決定」として、「意見の違いや多様性を認め合い、折り合いをつけるなど集団としての考えをまとめたり決めたりして「合意形成」を図る。」と示されている（参考：解説書）

※ build a consensus through discussions…話し合いで合意を築く。それではそれぞれの意見〔考え〕の「合意形成」に関してどのような話し合い（学級活動）が考えられるか。単に「賛成・反対」の多数決ではない全体の意見の集約が大事だというのが、実際にはどう考え実施したらよいのか。（従前は「集団決定」が主流であったが）

「合意形成」の過程は、いわゆる「賛成、反対」の奥にある真の利害・関心を関係者から聞いていき、全ての利害・関心を満たす提案を創り上げていくプロセスのことである。

その「合意形成」には公共事業等の社会的課題のみならず、企業・団体の会議、まちづくり、家庭内の話し合いなどの場合には、次のような4つの着地点があると考えられる。①「棚上げ・回避」、②「譲歩と説得」、③「妥協」、④「統合」である。よく外交問題などで行われる「合意」は、いわゆる①「棚上げ・回避」が見られる。つまり、「何も決定しない、解決や合意を先延ばしする」ことである。抱えている問題はなくなりますが、これも合意形成の一つである。

二つ目は「譲歩と説得」である。相手の意見に合わせたり、自分の意見に同意してもらったりする方法（「折り合い」はその一つか）である。これは、片方にメリットがある合意形成と言える。次のような『合意形成』もある。③「妥協」である。互いに譲り合う（これも「折り合い」）が、互いにより部分があって合意する方法である。このためには当然話し合うことが必要になる。さて、理想的な合意形成は④「統合」であると考えている。互いに譲り合うことなく、ともに満足できるような『案』を模索する。そして、自分にとってよいことであり、相手にとってもよい合意を目指すことにする。つまり、「WIN-WIN」の関係である。その上で見つけ出した「合意」案が「統合」なのである。

5. 「折り合い」と合意形成

よく競馬のレース（競走）などでは「折り合う」、或は「折り合いが付く」という。競走馬が騎手の制御・命令に従う様子のことを言うが、国語辞典には、（1）人と人との関係。「嫁と姑との一が悪い」、（2）互いに譲り合って一致点を見つけること。「－をつける」「二人の間で－がつく」、（3）連句で、長句のとめの字と、短句の中のとめの字とが同じであること。「てにをは」でとめる場合、避けるべきこととされている。

「折り合いを付ける」…英語では「reconcile」という。通常仲直りさせる、和解させる、調停する、一致させる、調和させる、(～を)(～と)一致させる、(～に)甘んじる、黙って従う、(しかたなく)満足する。

〔例〕reconcile two different ideas…「二つの違った考えを一致させる」

〔例〕How do you reconcile your ideals with reality…「君は理想と現実をどうやって一致させるのか。(折り合いを付ける)」

- ①意見を譲り、妥協点を見つける…譲歩し合う ・譲り合う ・妥協し合う
・お互いに折れる ・折り合う ・譲歩する ・歩み寄る ・折れる
- ②交渉において互いに同意できるポイントを見つける…折り合いを付ける
・妥協する ・着地させる
- ③決着をはっきり付けずに、適当なところで妥協する…なあなあで済ませる

(1) 「折り合い」と「人間関係」―意見を譲り、妥協点を見つける

平成20年度の小学校学習指導要領解説書 特別活動編には「折り合い」と言う文言は、3ヶ所に出ている、①「意見の異なる人と折り合いを付けたり、他者と議論して集団としての意見をまとめたりする話し合い活動…」(解説書 P22)、②「児童は、幼稚園や保育園での折り合いを付ける経験を基盤として…」(解説書 P36)、③「楽しい学級生活をつくるために折り合いを付けて集団決定ができるように…」(解説書 P52、55)

このことから、前回の学習指導要領では「折り合い」を意見の譲り合い、妥協点を見つけ、そのことに基づいて「集団決定」に結び付けると捉えることができる。さらに、これまでの集団決定が「自分が賛成していないことに決まっても、集団決定したことについて、気持ちよく従い、協力する」ことを求めてきた。しかし、今回の「合意形成」は、このような譲り合いや、妥協、納得しないものに従うことなどを乗り越える概念と捉えることができる。

(2) 新学習指導要領―意見の受け入れと思いの受け止め

今次の小学校学習指導要領解説書 特別活動編には①「意見の違いや多様性を認め合い、折り合いをつけるなどの集団としての考えをまとめたり…」(解説書 P45)、②「安易に多数決で決定することなく、折り合いを付けて集団としての意見をまとめることの大切さ…」(解説書 P49)と示されており、③幼児期の教育との接続及び関連には「自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら…」(解説書 P147)

また、「合意形成」については、学習指導要領第6章の第2(学級活動)の3の(1)において、学級活動の学年段階(低～中～高)配慮事項でその内容が示された。具体的には「自分の意見を発表したり、他者の意見をよく聞いたりして…」(低学年)、「理由を明確にして考えを伝えたり、自分と異なる意見も受け入れたりしながら、集団としての目標や活動内容について合意形成を図り…」(中学年)「相手の思いを受け止めて聞いたり、相手の立場や考え方を理解したりして、多様な

意見のよさを積極的に生かして合意形成を図り…」(高学年)

そして、今次の小学校学習指導要領解説書 特別活動編では、「折り合い」そして、「合意形成」(集団決定)について、前回と比べ、相手の「意見の受け入れ、思いの受けとめ」ということを重視し、特に「合意形成」については、低学年では、「合意形成で決めたことをみんなで実践する」ことによって、「合意形成」の意義理解を体感し、中学年では「提案理由を踏まえ、自分もよくみんなもいいものとなるよう合意形成を図り、決まったことをみんなで協力して実践する」ことなど、協働して取り組む活動の充実につながるようにする、高学年では「出された意見を基にして、組み合わせたり、よいところを取り入れて新たな考えを生み出したりするなど、創意工夫を生かして合意形成を図ることができる活動にする」と解説されている。

以上のことから、「折り合い」と「合意形成」の捉え方は、相手の意見や思いを受け止めるとともに、自分もよくみんなもいいものになるように新たな考えを生み出したり、創意工夫を生かしたりして、その上で見つけ出した「合意」案を「統合」することと考えられる。その過程では、「意見の譲り合いや、妥協、自己主張と、自分勝手」などが繰り返され、その積み重ねが、学級の人間関係の改善(相互理解)につながると考える。

6. 学級活動(1)の創造(未来を創造する合意形成について)

(1) 学級活動(1)の創造

① 課題の発見：目指す学級像(学級目標の設定：学年目標、教育目標)

子供たちが、こんな学級にしたい(教師の考え：教育観と校長の経営方針、学校の教育目標)の視点から：ビーイング的に示すことも

「問題の発見」→学級問題の自分事化(そのために、視点転換)

視点転換→自分のこととして受け止める→他者に広げる

「議題」：提案理由の練り上げ：目指す方向性、何のために行うかが大切になる。

② 集団思考(熟考)：問題の解決

考えの考え方(アソムタイム：貝拾い)：思考の拡散

話合いの仕方の工夫 ブレスト、ホワイトボードミーティング視点カード

話合いのスキル



新しい話合いの仕方 学級活動(2)・(3)と関連させ：思考の収束

学級活動(1)の単元化

問題の自分事化(深い学び)→振り返りから見通し

(2) 話し合いに臨むに当たって 自分の考えをもつために

① 考える視点 (問題の自分事化)

ア 振り返りを重視する (振り返られる素材: 教室環境、ポートフォリオなど)

過去の自分 (振り返りより) を見つめさせる

イ 取り組む (取り組んでいる) めあて (学級目標等) を投げかける

ウ 今の自分にできること (何をしたいか、何ができるか) を意識させる

エ 視点転換発想: 自分のこととして受け止める→他者に広げる

なぜ、『視点転換発想』が必要なのか?

- ・これまでやってきたこと
- ・自分の得意技
- ・出てきたアイデアを2つ組み合わせて
- ・他の係とのコラボ
- ・学級目標や係の目的達成
- ・お願いカードを生かす
- ・困っていることを助ける
- ・今の季節しかできない
- ・みんながびっくり

「保護者の期待」

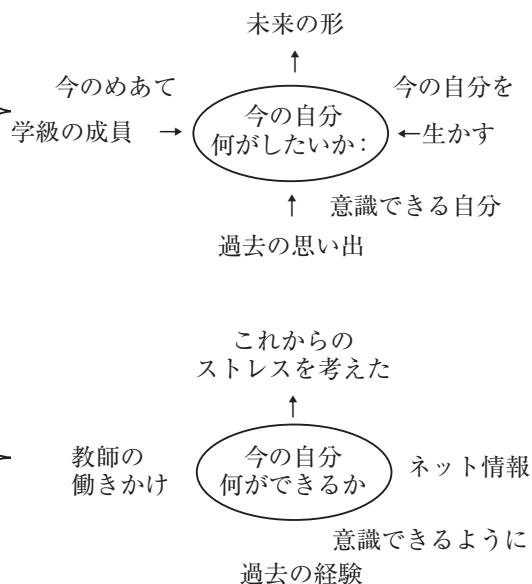
(保護者を取り込む) →メッセージ

※期待に応えて: 振り返り: 報告会

※ 「ストレス解消」: プレスト

保護者の情報

なぜ、視点転換発想が必要か?



発想を転換するために、振り返りを重視したい。過去の自分、取り組んでいるめあて、今の自分にできることなどを関連付け、『何がしたいのか、何ができるのか』を意識させる。そのための手立て、その視点を明確にし、重点化、意識化する。

すなわち、今の自分が『何ができるか、何がしたいか』を3つの側面から子供に働きかける視点 (投げかけの言葉の要素) として、過去の経験、めあてや成員、教師の働きかけ、今の自分を生かす (情報収集) から、未来の形 (今後の自分や集団) を新たな方向性を生み出す方法として、取り入れる。→1つの合意形成となると考える。

これらをまとめると、次のようになると考える。

② 教師が子供たちに働きかける視点 (投げかける言葉の要素)

ア 過去の経験 (教室の掲示、子供自身の活動の蓄積)

イ めあて (学級目標や活動の目標) や学級の成員の現状

ウ 今の自分を生かす（情報収集）

以上の2つの働きかけから、子供たちが考える（発想）は

未来の形（今後の自分や学級集団の今後の新たな方向性を生み出す）を考えさせる。

（2）未来の形を合意形成に向ける

- ① 新しい合意形成：自分にとっても、相手にとってもよい合意→統合（新たな考え）

自分たちが考えたことに責任をもつ→振り返りの重視

※ 新しいアイデアが生まれる（統合）→実践→振り返り（満足）自己肯定感→次の課題に気付く、取り組むという流れを重視する。

- ② よりよい人間関係の形成が重要

人間関係に関する一定のルールを知って、適切かつ効果的に実行できる技術の習得が必要（コミュニケーション：ソーシャルスキルとして）と考える。

ア 傾聴：相手の話を聴く

（ア） 人の話を聴く意味

相手の情報を得る

相手に社会的報酬（存在の肯定・注目・尊敬・同情・喜び・安心・満足など）

相手との関係性を安定させる（聴くことで情報が増え よく知っている人となる）

（イ） 人の話を聴くために

相手の話を温かい雰囲気でも聴く

相手の話を理解する

共感的に聴く（関心に向ける、相手の価値観を大切にする、非言語を意識する等）

（ウ） 相手が話したくなる聴き方

相手の話を途中で遮らない

話題を変えない

相手の気持ちを否定しない

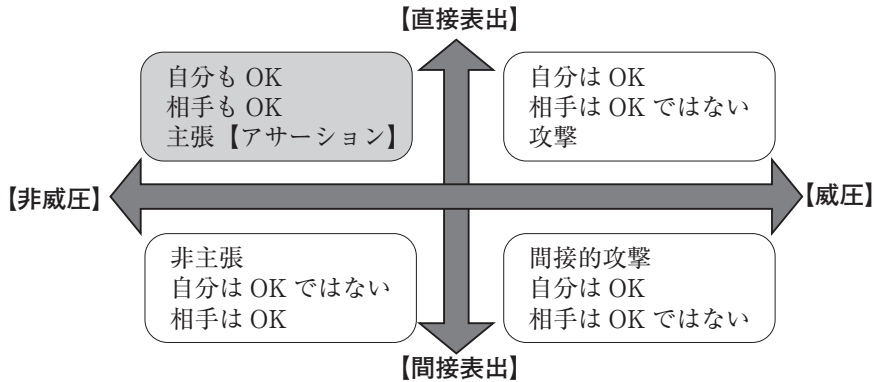
相手の話を促す質問をする

タイミングのよい相づち（言葉の一部を繰り返す、別の言葉で言い換える、要約する）

イ 主張性：自分の思いを伝える（アサーション）

（ア） 主張性とは：自分の権利を擁護し、思考、感情、信念を直接的に、そして、他者の権利を尊重するような適切な方法で表現すること（ランゲとヤクボウスキー 1976）→情報の伝達 感情の共有

（イ） 他者に対する自己表現の反応（合意に向けて）



(新版 人づきあいの技術 ソーシャルスキルの心理学 相川 充 2013)

○攻撃的な自己表現 (やっていいにきまっている)

「私は OK 相手は OK ではない」

- ・相手の気持ちや意見は受け止めない
- ・不満や猪狩の気持ちが相手に残る
- ・必要な情報が共有されない
- ・人間関係が上下関係になりがち
- ・自分の主張【意見】を通して後味が悪い
- ・自己表現が強がりになる

○間接的な自己表現 (言いたいことは分かるよね)

「私は OK 相手は OK ではない」

- ・言葉では直接攻撃しない
- ・非言語的に攻撃【不機嫌、舌打ち等】
- ・策略的な手段【陰口、悪いうわさ】
- ・言うこととやることにズレがある

○非主張的な自己表現 (断ったり、気分を害したり、迷惑をかけてはいけない)

「私は OK ではない 相手は OK」

- ・自分の気持ちや意見が伝わらない
- ・劣等感などが自分の中に残る
- ・必要な情報が伝わらない
- ・人間関係が上下関係になりがち
- ・不快感などが心身に悪影響を及ぼす
- ・対等な人間関係をつくりにくい

○アサーティブな自己表現 (自分も相手も大切)

「私も OK 相手も OK」

- ・お互い素直な気持ちで意見を表現
- ・さわやかな気持ちが残る
- ・意見が異なっても、歩み寄れる
- ・違う意見を知ることで可能性
- ・深い理解に基づく人間関係
- ・一人で考えるよりいい考え

ウ アサーティブになるために

「感情を表現する」

「自分の伝えたいことを適切に話せる」

「できるだけ自分の感情を素直に表現する」

「失敗をおそれない・あきらめない」

「考え方や受け止め方を柔軟にする」

「初めは主語が私はで、伝え、考えが明確になれば、主語は、私たちに」

「肯定的に表現する」

このような表現の仕方のスキルを、全教育活動の中で子供たちに身につける必要があると考える。また、そのための話型の基本形も示して、使えるようにしていく訓練も大切である。

例えば

お願い（依頼）

説明（理由）＋感情＋依頼（お願い）内容＋肯定的結果

「私は、系の新聞を発行するのに、～～までに間に合うか心配です。この記事を〇〇君が月曜日までに仕上げてください。そうすれば、発行までに間に合います」

断り

謝罪（感謝）＋説明（理由）＋断りの表明＋代替案

「ごめんなさい。直ぐに記事を書きたいのですが、取材ができていません。月曜日には、間に合いません。火曜日には取材も終わり間に合うようにしますので、待ってください。」

このように、日常生活の中で、人間関係をよりよくするように、互いを大切にしながら会話をを行い、生活をしていく。その基本が「あいさつや互いに掛け合う掛け声」そして、気持ちよく聴くことは、相手を大切にするということ子供たち一人一人が意識して、実践を積み重ねる学級経営が、「未来を創造する合意形成」を築くことにつながると考えている。

（３） 学級活動における発言の分析の類型化（試案：別紙参照）

未来を創造する合意形成を築くためには、日常の学習などの話し合いで、児童が話し合っている根拠（学級会では、提案理由）に基づき、話し合いで出された提案（考え）について、「この提案（考え）の良い点は何か」「この提案（考え）の問題点は何か」「問題はどのように改善すればいいのか」「改善を図るためには何が必要か」などの意識を図り、豊に創造し拡散して、収束をする話し合いをすることが重要と考える。

そして、これまで示してきたサーションなど児童の話し方のスキルが学級活動（１）話し合い活動（学級会）で、どの程度定着し、上記の「拡散、収束の場の設定（時間の確保）」を行い、指導することが重要と考える。その際、児童の内容がどの程度思考され、その考えの主体が「自分」から「みんな」となり、新たな考えが生み出される基（未来を創造する合意形成につながる発言）となる発言内容の指針を「試案」として、22段階にまとめた。（別紙）

各段階は、児童が提案理由をどのように捉えているかの「思考レベル」で3段階に分けた。そして、各段階を「無自覚的思考」「自覚的思考」「創造的思考」とした。さらに、各段階を個人の感情の面から細分化し7つの判断基準に分けた。なお、教師の誘導型は、児童の立場から考えて、最低

の1段階で、児童の判断や感情の分類には、属さないものとした。(別紙終末参照)

① 無自覚的思考(教師の指示:無関心を含む)

提案理由を考慮しないで、自分の感情のままの発言。

ア 対自感情:自分の好き・嫌いを判断基準とする。(根拠に対人関係を含む)

イ 対他感情:自分の快・不快を判断基準とする。(根拠を創作する)

※児童に活動を促したり、教師が学級活動を理解していなかったりした場合などの段階で、教師の一方的に決めてしまうときもの段階も考えた。

② 自覚的思考

提案理由を意識しつつ、制度や条件などの要因、妥協や譲歩など相手を意識した発言。

ア 対自尊重:好き・嫌い、制度(多数決)を判断基準とする。(提案理由を重視)

イ 対他尊重:時間や場所などの外的条件や、提案理由遂行、考えの統合などを重要な判断基準とする。そのため、折半、順序、良さなどを考えの根拠とする。

③ 創造的思考

提案理由遂行を意識し、出された意見を基に新たな考えを生み出す発言。

ア 相互尊重:出された意見理由を尊重し、それを生かした考えを判断基準とする。そのため、統合、試行、情報収集、活動重視を根拠とする。

イ 未来創造①:提案理由を意識し、協働思考して、新たな考えを生み出すことを判断基準とする。そのため、発想の転換や学級の現状の見直し、全員の意識を探るなどの示唆をする。

ウ 未来創造②:未来創造①の段階の問題点などの解決を図る策を考えるために、協働思考することの大切さを判断基準とする。その際の協働思考として、企画提案、プロジェクトの方策を示唆する。

上記のように、子供たちの発言の内容を捉え、思考や意思決定の背景を把握することは、子供たちの資質・能力の育成に係る視点として重要と考えている。また、一覧表に示した子供の意見(考え)の例示については、今後も学級会の授業観察を積み重ねて、類型化の精度を深めていく考えである。

(4) 新しい話し合い活動(学級活動の単元化)

学級活動「(1)学級や学校における生活づくりへの参画」の学習過程

ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

①問題の発見・確認→②解決方法等の話し合い→③解決方法の決定→④決めたことの実践→⑤振り返り→⑥次への課題解決へ

この学習過程が例示された。そこで、学習過程という意味を考えると、これまでは、②と③がいわゆる「学級会」の時間で、④が集会など1単位時間を使うものと短時間で済ますものがあつた。

また、振り返りも「帰りの会」やその活動の終了時に行っていたことが殆どと思う。

今次では、学習過程を「事前の活動」「本時の活動」「事後の活動」では、「指導過程」でも「事前の活動」「本時の活動」「事後の活動」となっている。（本来は「事前の指導」「本時の指導」「事後の指導」と記したい）

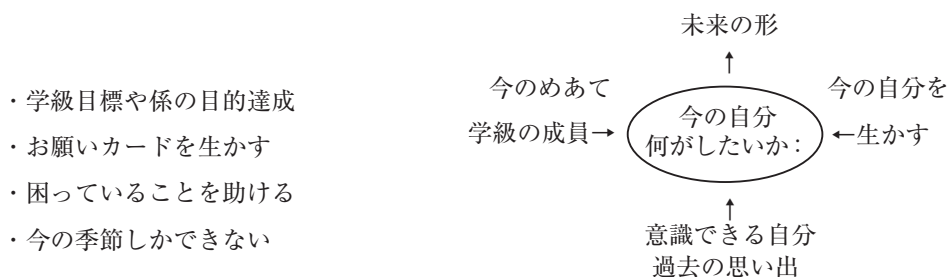
すなわち、1単位時間で指導（活動）するのは、これまでの「学級会」で、活動過程、指導過程と示されても、何の改善にもなっていない。「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善と呼ばれても、時間の確保が示されないで、改善されるとは思わない。どの時間に「問題の発見・確認」（計画委員会の指導、各自に考えをもたせるのか）

解説書に示された「問題の発見・確認」その流れとして（問題の発見→学級としての課題の選定→議題の決定→活動計画の作成→問題意識を高める）この時間をどう確保するのか。また、実践の時の振り返りから次の課題解決（見通し）につなげる指導はどのようにしていくのかなど、この問題点が解決していないと、誰もが取り組める学級活動（学級会）にはならない。

そこで、示された指導過程（活動過程）を児童の実態（学級活動の習熟度）に応じて、単元として構成したい。ある諸問題の解決に向けて、次のように単元として構成し、時間を確保し、経験を積み重ね、学級会のスキルを身に付けさせたい。

第1次：問題の発見→学級としての課題の選定→議題の決定→活動計画の作成→問題意識を高める。

1単位時間を設定して、全児童に「問題の発見」をさせる。この際、学級目標を意識させる。（どんな学級にしたいのか？そのために今改善することは）



この考えに立って、問題の発見→分類・整理→緊急な問題に→全員の意思統一
一人一人が改善策（案）を考え、全員で検討し、各グループに分かれ最強の案に練り上げる。（小集団活動の活用）できた案は、説明を付け、掲示→全員が見て、考えを事前に聞けるようにしておく。

司会グループの指導（活動計画の作成）同時に教師の指導の下、計画委員会（司会グループ）で活動計画を作成する。活動計画の提示

第2次 学級会

出し合う段階：各グループのプレゼン（企画、提案、プロジェクト）

比べ合う段階：提案理由には、どの案がより最適化、或は、新たな案を創造する誰もが「WIN-WIN」の考えになるようにする。

まとめる段階：新たな「合意形成」で決定することを目指す。

振り返りから見通しへ（いつまでに何をするか、次回はどうか？など）

第3次：決めたことの実践と振り返り（次の課題への見通し）

一連の活動として「実践」し、次の課題へつなげる。

このように、学級の児童の実態に応じて、学級活動（1）を単元構成して指導に当たり、相互に『WIN-WIN』の関係となる合意形成を積み重ねることが必要である。児童にスキルが身に付いたと判断したら、第1次の時間は、1日の生活の中で確保するようにしたい。そのためにも、学級活動の年間指導計画（少なくとも、学期指導計画）丁寧に作成したい。児童に実態に照らし合わせ、オリエンテーションでしっかり、学級活動（1）について児童が理解できるように指導し、実践を積み重ねたいと考える。

7. 今後の課題

これまで述べてきた児童の発想の拡散、収束の指導・活動や発言のスキルの面を児童が身に付けるためには、年間35時間しかない学級活動だけの活動時間では無理がある。そこで今回改訂された学習指導要領にある他教科等との関連を踏まえた「カリキュラムマネジメント」が重要になると考えている。児童の実態を把握し、学級活動の年間計画を作成する際に、活動内容とともに、発想の拡散・収束などの学習体験をどのように積み重ねて行を他教科等との関連を十分に考えていくことが必要になる。また、その際の視点となるのが、各教科等の目標に掲げられたその教科等の「見方・考え方」となる。さらに、学級活動の目標の冒頭に「学級や学校の生活をよりよくする～」とあることから、学級生活の改善を図るために、教師の「学級経営」との関係も考慮することが大切であると考えている。すなわち、「カリキュラムマネジメント」「学級経営」との関連を考えながら、「未来を創造する合意形成の在り方」を追究することが課題である。

学級活動における子供の発言の類型化〈22段階〉

	子どもの意見	判断基準	意思決定の背景	基準	思考	
0	教師：今度、お楽しみ会として、野球大会やらない？	教師の判断	教師が一方向的に、自分の経験や、周りのクラスと同じように活動をさせる必要があると感じ、子供に活動を促す。	教師	無自覚的思考	
1	・サッカー大会がやりたいです。 ・野球大会に反対です。	好き嫌い 反応・対抗	自分の好き嫌いを基に、友だちの意見に反応・対抗することによって意思決定する。	1		
2	・野球大会がいいと思います。なぜかと言うと、野球よりサッカーが好きだからです。 ・サッカー大会に賛成です。なぜかと言うと、サッカーがやりたいからです。	好き嫌い 優先順位	自分の好き嫌いを意識し、それに優先順位を付けることによって意思決定する。	対自感情		
3	・サッカー大会に反対です。なぜかと言うと、サッカーの得意な人ばかりがボールを触るので、ボールを触れない人が面白くないからです。 ・野球大会に賛成です。ホームランを打つと最高だからです。	快・不快 経験の想起	自分自身の快・不快を判断基準とし、それを表明するためにこれまでの経験を想起して意思決定する。	2		
4	・野球大会に反対です。なぜかと言うとボールを打てない子がいると面白くないからです。 ・サッカー大会に賛成です。休み時間はボールが蹴れないからです。	快・不快 理由創作	自分自身の快・不快を判断基準とし、それを表明するために理由を創作して意思決定する。—こじつけ—			
5	・サッカー大会に反対です。なぜかと言うと、サッカーボールの方が大きくてボールが当たると痛いのでやめた方がいいと思います。 ・野球大会に反対です。ボールが小さく堅いので当たると怪我をするからです。	快・不快 理由創作（対抗）	自分自身の快・不快を判断基準として意思決定するが、他者の意見に対抗して理由を創造する。—対抗こじつけ—			
6	サッカーをやりたい人はサッカーを、野球をやりたい人は野球をやるのはどうですか？また他のクラスと対戦するのもいいと思います。	快・不快 理由創作（折半）	自分自身の快・不快を判断基準として意思決定するが、他者の意見に尊重したかのように理由を創造する。—折半こじつけ—	自覚的思考		
7	サッカーと野球の賛成人数を比べるとサッカーの方が多いので、今回はサッカーをすればいいと思います。	制度依存 （多数決）	多数決の制度に依存して意思決定をする。 —多数決—			3
8	サッカー大会がいいと思います。なぜかと言うと、提案理由がみんなが楽しめるスポーツ大会を考えようなので、今、体育でサッカーをやっていて楽しいからです。	きまり 提案理由を根拠	提案理由は意識するが、自分の好き嫌いを判断基準として意思決定をする。 —教師の意向付度—			対自尊重
9	サッカーをやりたい人と野球をやりたい人がいるので、時間を半分ずつ分けて20分ずつやればいいと思います。	時間場所 適応・折半	時間場所などの外的条件を判断基準とし、それを実現するためのアイデアを折半する形で意思決定する。 —半チャン・半ラーメン—			4
10	今回は野球をやって、次の時間にサッカーをやればいいと思います。	時間場所 適応・順序	時間場所などの外的条件を判断基準とし、それを実現するためのアイデアを順序を決めることで意思決定する。 —献立方式—			対他尊重
11	みんなが楽しめるスポーツ大会をしようと言う提案理由を達成するために、野球大会とサッカー大会の長所と短所を出し合って、よりよいアイデアを考えるのはどうですか？	提案理由遂行 長所短所列挙	対立した意見の長所短所を出し合って、課題を明確化し、新しいアイデアを創出させることで、意思決定する。 —長所・短所列挙法—			5
12	提案理由を達成するためには、野球のルールでサッカーボールを蹴るキックベースをやればいいと思います。	提案理由遂行 適応・統合	話し合いの提案理由を遂行することを意識して、アイデアを統合することで意思決定をする。 —カッター方式—			
13	みんなが楽しめるキックベースにするために考えたルール・アイデアを、一度試してみるのはどうですか？	提案理由遂行 適応・お試し	話し合いの提案理由を遂行することを意識して、話し合いだけでは決着がつかないことを予想して、問題点を洗い出すために、お試し活動をして意思決定する。 —試食方式—			
14	新しいルール・アイデアをさらに集めるために、いろいろな人から情報を集めるのはどうですか？	提案理由遂行 意見尊重 他者尊重	それぞれの意見を尊重し、新しいアイデアを収集するために、他の人に聴きに行き発想を広げることで意思決定をする。 —情報収集—			
15	今からでは新しく考える時間が少ないので、今ある意見の中からキックベースをやることを決めて今回は実施し、次の時間に新しいスポーツを考えればいいと思います。	提案理由遂行 時間場所 創造・折半	話し合いの提案理由を遂行することを意識するとともに、時間的制限を考慮して、アイデアを折半するする形で意思決定する。 —活動重視—			6
16	みんなが楽しめるスポーツ大会をしようと言う提案理由を達成するために、サッカーでもない、野球でもないみんなが楽しめる新しいスポーツを考えたい方がいいと思います。	提案理由遂行 創造・進取	話し合いの提案理由を遂行することを意識して、アイデアを創造することで意思決定をする。 —ちゃぶ台返し（発想転換）—			
17	みんなが仲良くなるためのスポーツ大会をしたいという提案理由には、今のクラスに何らかの課題があるのだと思います。課題を出し合って、それを直接解決する方法を考えるというのはどうですか？	課題の明確化 創造・発展	提案された理由に立ち返り、課題を明確化して問題を解決するための話し合いを主体的に行い意思決定をする。 —課題の明確化—			
18	今回クラスのことで出された課題は、どのくらいの人かどの程度課題だと感じているかアンケートを取って調査する必要があると思います。その上で、対応策を考えるのはどうですか？	課題の明確化 創造・飛躍 発展	提案された理由に立ち返り、課題を解決するための話し合いを行うために、具体的に意向調査を行い意思決定をする。 —課題の明確化（調査測定）—			
19	新しい課題を達成するためには、アイデアプレゼンを行うとよいと思います。そのためアイデアをたくさん出し合う時間（100本ノック）を設定するのがいいと思います。	アイデア創造 飛躍思考	話し合いを通して導き出された課題を明確化し、それを解決するために新しいアイデアを創造して意思決定する。 —100本ノック（視点転換）—			
20	新しい課題を達成するためのアイデアは、グループで意見を出し合い（プレスト）企画書を提案するのはどうですか？	協働 創造・飛躍 発展・活用	問題解決を行うためには、協働思考をすることが大切であることを判断基準とし、これまでの実践から最良の解決策を選択して意思決定する。 —企画提案型—	7	未来創造②	
21	新しい課題を達成するためには、「プロジェクトチーム」立ち上げ、意見を出し合い企画書として提案するのはどうですか？	相互尊重協働 創造・飛躍 発展・活用	よりよい解決策を導き出すことが大切であることを判断基準とし、これまでの実践から最良のアイデアを統合して意思決定する。 —プロジェクト方式—			